

天理に戦争があった

目 次

- 第1章 特攻と天理 本土決戦の中心に その1 その2
- 第2章 もともと何のための飛行場だったのか
- 第3章 だれが飛行場を作ったのか

第1章 特攻と天理 本土決戦の中心に その1

◎「緑十字機」と大和飛行場

2015年8月20日の「毎日新聞奈良版」に、二枚の飛行機の写真が紹介されました。次の写真はその一枚です。

これは、アメリカのダグラス社から設計図を購入して日本で作られた日本海軍「零式輸送機」という飛行機で、1945年8月15日までは緑色に赤い「日の丸」が描かれていました。戦争に負けてから、戦争には使わないことを示すため白地に緑十字に塗り直されました。(緑十字機)



写真の背後には天理市兵庫町にある大和神社の森が写っています。また森の手前には奈良・桜井

線、当時国鉄の線路が見えます。飛行機が止まっている場所は、現在の天理市立南中学校から南へ50mほどの位置です。この飛行機は、いつ、どんな目的で天理にやって来たのか。また、どんな人が操縦していたのでしょうか。

◎最後まで特攻をことわった機長

1945年、中国の青島(チンタオ)にあった日本海軍の航空基地では、ある緊張したことがらがおこっていました。特攻を希望する者は紙に書きなさい。ということでした。希望する者は、といっても実際は、ことわることの出来ない命令でした。

飛行機の乗組員全員が特攻に希望と書きました。しかし、一人だけ希望を出さず命令を拒否した乗組員がいました。東秋夫(あづまあきお)という機長でした。(右の写真)



【大和飛行場】

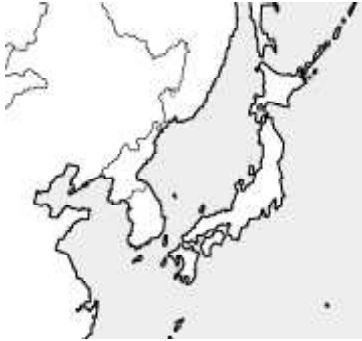


東秋夫さんは中国に本部を置く「一三(ひとさん)航空軍」に所属して中国だけでなくガダルカナル島を奪い合う南太平洋の戦いにも参加しました。アメリカの飛行機や軍艦と戦うには、どれだけの準備とチームワークが必要か、身をもって体験していたので最後まで特攻に反対したのです。

上官に対して反抗したため、何か罰が下されるだろうと思っていると、奈良県の大和基地へ行きなさいという命令が出たのです。東さんの操縦する「零式輸送機^{ぜろしき}」は、アメリカの設計図で作られていて操縦出来る人が他にいなかったこと、東さんが激戦の中をくぐり抜けて何度も生還してきた実績が評価されたのでしょう。この輸送機は、「一三(ひとさん)航空軍」司令官の専用機でした。

◎「一三(ひとさん)航空軍」司令部が天理に

「一三(ひとさん)航空軍」とは、日本と中国・朝鮮の間の海を空から守る大切な航空隊でした。多くの兵士と民間人が日本との間を行き来するためにも、絶対に移動させてはならない航空隊でした。その航空隊をアメリカ軍との決戦に使わねばならない所まで日本軍は追い詰められていたのです。



1945年4月1日から始まった沖縄の戦いは、九州に基地を置く航空部隊が戦いを担当しました。しかし、3月に九州の基地を航空機で攻撃してきたアメリカ軍に対して、日本軍は先制攻撃でやり返しました。数少ないベテランの操縦士は4月の沖縄戦を待たずに多くが戦死しました。その結果、4月から始まる沖縄戦は、飛行機の操縦を覚えただけの未熟な若者で戦うことになり、さらに多くの犠牲者を出しました。

沖縄の戦いを日米両軍がくり広げている1945年6月1日、中国・青島(チンタオ)基地の「一三(ひとさん)航空軍」の司令官が天理にやって来ました。はじめに紹介した飛行機は6月1日に東秋夫機長が操縦して天理にやって来たのです。

◎1945年6月1日 大和基地のようす

6月、まだアメリカ軍の飛行機も天理に多くは飛んでは来ず、ゼロ戦も3～4機でいどしかなかったそうです。機長の東秋夫さんは、結婚したばかりの奥さんを九州の実家から天理に呼び寄せ、農家に住居を借りて新婚生活を始めました。最前線で戦ってきた東秋夫さんにとって天理の大和基地は、とても静かな場所に見えたのです。

◎1945年7月1日 「海軍総特攻」

6月末ごろになると、アメリカ軍の飛行機は「わがもの顔」で日本の空を飛び回りました。沖縄の戦いが終わったのです。

そんな状況の中で、7月1日。新しい海軍の方針が出されました。「海軍総特攻」です。アメリカ軍は、もう間もなく日本本土に上陸してくるだろう。しかし、日本海軍には船もなく、残った船や潜水艦に入れる石油もなくなっていました。戦う方法は、飛行機だけでした。そこで船や潜水艦にのっていた兵士をすべて故郷に近い航空基地に帰しました。海で戦っていた兵士に、陸で戦えと言うわけです。戦うための武器がなければ「徒手空拳」(握りこぶし)でアメリカ兵と戦えという命令でした。

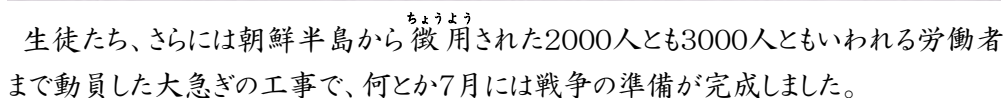


◎6月～7月 大和基地を本土決戦の中心地に

近畿地方に戦争の中心(司令部)を移動させよう。そう考えたのは、海軍で戦争の作戦を立てる責任者となっていた淵田美津雄(左の写真)でした。西日本全体を飛行機で飛び回って、本土決戦の準備をしました。

当時、天理の大和基地は、まだ本格的な戦争の準備

ハガキ一枚で徴用^{ちようよう}の命令を受けた一般の国民だけで無く小学生・中学生・女学校の



この「月刊大和タイムス(1950年3月号)」の図面によると東西の滑走路のコンクリートはまだでき上がっていません。また、長柄町の北側、現在竹之内町から長柄運動公園にむかう道路は、練習機の滑走路として使われていた様子が見て取れます。

ゆうゆうと日本の沖合にやってくるアメリカ軍の多くの軍艦を一隻でも沈めようと計画されたのが「土佐沖航空戦」でした。「一三(ひとさん)航空軍」の飛行機が中国青島(チンタオ)基地や九州・本州のそれぞれの基地から天理の大和基地に集められました。

- 4 -

7月9日に「土佐沖航空戦」の出撃をひかえて、多くの飛行機が天理基地に集まり、周辺の神社の森などにかくされていました。天理基地の写真はほとんど残っていないので次の写真6枚は参考資料です。



一式陸上攻撃機



96式陸上攻撃機



すいせい
彗星艦上爆撃機



99式艦上爆撃機



てんざん
天山艦上攻撃機



97式艦上攻撃機

7月8日、これらの飛行機が天理にそろいました。しかし、多くの飛行機が集まっていることは、上空を飛ぶアメリカ軍によって目撃されていました。

7月8日、夜8時。沖合の航空母艦を飛び立ったアメリカ軍機が攻撃を加えました。

○Fさんの証言

御経野町のFさんは、子どもが産まれそうな大きなおなかをかかえて、いつお産が始まってもいいようにお産の道具まで持って防空壕に入りました。防空壕の中でお産をすることはありませんでしたが、長女の誕生日、数日前の出来ごととして空襲のことを覚えておられます。また、

「あんなにすきまじい花火を見たことはなかった。」

と夜間攻撃のおそろしさを表現されています。

夜間に航空母艦から山に囲まれた奈良盆地を攻撃するということは、当時の技術ではとてもむずかしい特別なことでした。しかもアメリカ軍の夜間攻撃を担当する航空母艦は1945年5月13日の沖縄戦で特攻機がぶつかって大破し、アメリカ本土に帰っていました。夜間攻撃を担当できるアメリカの航空母艦は、一隻だけではなかったのです。

◎1945年7月9日 「土佐沖航空戦」 200人におよぶ戦死者

7月8日の午後に大和基地に到着したために、森の中に隠すことをせず滑走路わきに止めていた横山長秋さんの部隊の数機(96式陸上攻撃機)は、この夜間攻撃で機体やタイヤに穴を空けられてしまい、翌日の攻撃に参加できなくなりました。

○横山長秋さんの証言

「80数機の飛行機が、9時と11時の2回に分けてアメリカ軍の艦隊めざして飛んで行った。帰って来たのは、わずか25～26機だった。」

「ゼロ戦は250kg爆弾をだしている。特攻攻撃だ。……帰ってきたゼロ戦はほとんど見えない。」



◎「大和基地は特攻基地だ」

○村上益夫むらかみ ます おさんの証言

「7月9日、大和航空隊の門をくぐると、白ハチマキの一团がものものしい式を行っていた。そのころ、どの航空隊でもみられた特攻隊の命令風景だ。」

「いやあ、こりゃ大したところに来てしまった。大和基地は特攻基地だ。」

南方の戦場を経験した村上さんは、静岡県の航空隊で若い兵士に飛行機の操縦を教えていました。新兵を訓練するための基地だと思っていた大和基地がすでに最前線の特攻基地になっていたことに驚きをかくすことができませんでした。



↑ 250kg爆弾をだいて出撃するゼロ戦 天理基地の写真はないので参考資料

戦闘機は一人乗りですが、爆弾や魚雷をだいて行く飛行機はそれぞれ2人乗りや3人乗りです。大型の爆撃機が落ちれば一度に7人ものが亡くなりました。この一日だけで約200人の若者が戦死しました。天理から戦争に行き、たった一日でこのように多くの若者が亡くなった事実を、だれが知っているでしょうか。

◎天理に空襲があった

7～8月にはアメリカ軍機の空襲は回数を増しました。その記憶は人びとの心に今も残っています。

○Tさん(竹之内町)

飛行機に乗ったアメリカ兵の顔がはっきりと見えた。マフラーを風になびかせていた。

○Hさん(在日朝鮮人、14歳のころ竹之内町の飯場にいた)

飛行場の北側にも朝鮮人の飯場がたくさんあった。空襲で朝鮮人の女性が亡くなった。

○Mさん(長柄町)

爆弾が落ちて長柄町で3軒の家が火事になった。

○Bさん(天理市立中学校元教員 長柄町)

私のおじさんが、燃えている家の中に飛び込んでいって仏壇の中から位牌^{いはい}を取り出してきた。

○Nさん(天理市立小学校元校長、長柄町)

となりの家に爆弾が落ちた。私の家の壁に大きな穴があいた。となりの家には通信部隊の兵隊が宿泊していたので「ねらわれたのではないか」と、うわさになった。

○^{ひろせ ひろし}廣瀬弘さん(北海道在住 予科練・海軍兵士)

25mm連装機銃を空に向けてかまえていた。1945年7月となりの国民学校にグラマン機のロケット弾が落ち、校庭にすりばち状の大きな穴があいた。

天理市の記録のどこにも「空襲で死者が出た」とは書かれていません。飛行場をつくるために飯場で生活する朝鮮人の命は記録に残す値打ちもなかったのでしょうか。

今回は、「第1章 特攻と天理 本土決戦の中心に その2」です。
本土決戦のための司令部が奈良県・天理にやってきます。毎日新聞に紹介された2枚目の写真を中心に学習します。